

父・祖父を思ひ

山谷えり子



明けましておめでたうございます。

皇紀二六七四年、甲午の年は、夢に向かひ伸びる年。何事においても発展していく年といはれてゐる。皇紀一二三四年生まれの聖徳太子、そして安倍総理も甲午の歳男でいらっしやる。

六十年前の甲午の年は、第五次吉田内閣で防衛庁設置法、自衛隊法、学校給食法などが公布され、竹島の領有権を韓国が主張したことに對し、国際司法裁判所への提訴に日本が動いた年でもあった。経済白書の副題は「地固めの時」であり、巷では「お富さん」「ひばりのマドロスさん」などの歌が流れ、ラチオドラマの中の花菱アチャコが言ふ「むちゃくちゃでござりまするがな」が流行語となり、映画「七人の侍」「山椒大夫」がヴェニス映画祭で銀獅子賞を受賞するなど、主権回復二年目の勢ひが感じられる。

現在公開中の映画、「永遠のゼロ」は特攻隊で亡くなった零戦パイロットの話である。亡くなって六十年後、祖父はどんな人物であったか、また、大東亜戦争について祖父の戦友に孫たちが聞いて回るといふストーリーに若い人たちが感動し、原作は四百五十万部を超える大ベストセラーとなっている。原作者で、NHK経営委員にもなられた百田尚樹さ

んを自民党の参議院政策審議会でお招きしてお話をお聞きしたが、涙ぐむ国会議員と共に若い秘書たちもゐた。

百田さんは『海賊とよばれた男』で出光興産の創業者である出光佐三氏を描いて、こちらもミリオンセラーとなっている。本の冒頭は「愚痴をやめよ、ただちに建設にかかれ。日本には三千年の歴史がある」と昭和二十年八月十七日、従業員に出光佐三が呼びかけるシーンで始まり、「従業員は家族も同様、一人の臆首もならん」と家族的経営を貫き、会社と祖国の再建に尽くす姿を描いてゐる。

『海賊とよばれた男』を書き終へた時に於いて、百田さんは、「出光佐三を描きながら昭和二十年代、三十年代のどん底の日本を立て直した数千万人の無名の男たちの物語を書いたと気づきました。明治の男は偉かったといひますが、本当にすごかったのは大正の男たちではないのかも思ひました。大正生まれの男たちは約千三百四十万人。そのうち、大東亜戦争で死亡した男性が二百万人。多くの戦友を失って戦地から帰還した大正生まれが、短期間で世界第二位の経済大国を作ったのですから」と語られた。現在五十七歳の百田さんは、「大正世代あつての豊かな僕らの世代」と言ひ、「だからこそ、何か役に立つことをして死にたい」と話を締めくくられた。

大正元年生まれは今年百二歳、大正十五年生まれは八十八歳とされる。大正生まれの父、祖父の生き方を体の中に感じ、その恩誼を思ひながら、甲午の年らしい発展と実りを祈念する。

(参議院議員、神道政治連盟国会議員懇談会副幹事長)

杜に
想ふ